

新聞を活用した 「新しい学び」の実践

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長
信州大学特任教授・淑徳大学人文学部専任教授

土井 進



「教育」の成否は、一に「教師」の力量に懸っている。このことはいつの時代においても教師自身が自戒しなければならない至言である。われわれ教師は、自分の力量以上のことを成すことはできない。だからこそ自らの力量を少しでも向上させたいと願って日々の教育実践に取り組んでいるといえよう。

さて、筆者の学生時代、東京小石川の同じ下宿に台湾の留学生で台北市西門小学校の游祥雲校長先生が住んでおられた。先生は帰国にあたり筆者の顔をじっと見つめてから、「常に進みつつある者のみ 人の師たる資格あり」と揮毫してくださった。いつの時代であれ、人の師となる職務を全うしていくためには、常に学び続け、向上無限の人生道を歩むことが教職倫理であるといえよう。まして、現代のように変化の激しい時代においては、「教職生活全体を通じて学び続ける教員」を目指して精進することが絶対の要請となっている。中央教育審議会答申（平成24年8月28日）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」において、教師に求められる資質能力は、「実践的指導力」であるとして、この用語が16回も用いられている。この用語が公的に初めて用いられたのは1987年（昭和62年）の教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」においてであった。それ以来今日に至るまで「実践的指導力」が教員に求められる力量を表す用語として用いられてきている。その含意するところは、「使命感」「児童生徒理解」「各教科等の専門性」「幅広い教養」等であった。これらを踏まえつつ今回の中教審答申で用いられている「実践的指導力」に、「新たな学びを展開できる実践的指導力」という用法が5回も見られるように、学習指導における力量の向上が強く求められている。

中教審答申においては、「新たな学び」を展開できる実践的指導力とは、次の4つの学習を取り入れることができる指導力であると解説されている。

- ①「基礎的・基本的な知識・技能」を確実に習得させる学習。
- ② 課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」を育成する学習。
- ③「知識・技能を活用する学習活動」や「課題探究型の学習」を展開する学習。
- ④「協働的学び」をデザインした学習。

このような「新しい学び」は、一斉授業による基礎的・基本的な知識・技術の注入という従来型の授業方法に風穴を開けることから出発しなければならない。上述の①の授業方法は、我が国の学校教育が大きな成果を上げたとして高く評価されている。問題は①を基盤として、どう②～④へと授業改善を図るかということである。グローバル化した今日の我が国の学校教育を、思考力・判断力・表現力等を育成する活力あるものに高めていく道は、教師がこれまでの自分の授業方式に新たな手法を導入することから始まる。新聞を活用した授業は、協働的な学びや課題探究型の学習に直結する。その学習過程において、児童生徒相互の思考力・判断力・表現力の切磋琢磨が実現される。要は、教師が思い切って従来型の授業方法に新たな一步を踏み出し、悪戦苦闘を経験することである。教師自身が「新しい学び」に挑戦する姿こそが、児童生徒の最大の教材となる。

2年間皆様と共にN I Eに携わらせていただき、貴重な学びの機会を与えていただきましたことに深く感謝申し上げます。